

アメリカインディアン幼稚園

エルマ・クラーク



エルマ・クラークは、米国ユタ州の、インディアン保護地区の一つ、フォート・ダチュスネーに開かれた幼稚園の主事、この報告は新しい試みの成功の記録と、将来への展望である。

ユタ州のフォート・ダチュスネーではじめられた、インディア

ンの幼稚園、これほど、私が最近分担した仕事の中で、すばらしいものはなかった。なぜかといえば、この幼稚園が、開拓的な新しい企画であつたばかりでなく、全くインディアン自身の力で実現したからである。(従来、こうした教育事業は、ほとんど全部が政府の手で開始され、また運営されてきた)

私たちが一緒に働いたのは十八か月に過ぎない。が、私は、こうした恵まれない子どもたちのために働く保育者すべてに、この子どもたちの目ざましい教育効果を見せたいと思ったほどであ

る。

子どもたちの言語面の発達度は一驚に値し、また、大小の筋力の進歩もすばらしい。しかし、一番注目すべきだと思うのは、注意集中力の増進である。現在では、多くの子どもたちが二十分ないし三十分の間、画をかいている姿を見るのは珍しくない。しかし、この同じ子どもたちが、最初の頃は、一分間でもじっとしてゐることができなかったのである。

こうして、おそらく、もっとも大きな変化は子どもたちの態度に見られるであろう。私たちが一番力を入れたことは、子どもた

ちが先ず自信をもち、のびのびと自由に成長するよろこびを感じるように、動機づけ、助けてやることであつた。私たちは、その目的のために、適切な、ゆたかな環境を与えるように努力したのである。

園児ひとりひとりの大きな写真が、各自のロッカーに貼られたが、これは、予想以上の効果をもたらした。子どもたちは、日何度、自分のロッカーの所に行つて、名前を呼びながら、自分や友だちの写真を指さしていた。このことは、彼らに、自他を識別する力を養う機会を与えた。また、ちょっと、助けてやると、子どもたちは、持ち物を、自分のロッカーにしまふ習慣を、すぐ身につけることができた。

製作室でも同様で、子どもたちは、使つたパズルやゲームを元の場所に片づけ、自分の行動に責任をもつことを学んだ。この小さいインディアンの子どもたちが、ほんのすこし、おとなが助けてやっただけで、物をきちんと始末することが好きになるというのは、おどろくべきことである。こうして、私たちは、子どもが、自分の生活と学習を心から愛することができるような雰囲気を提供してやれるのだと信じている。我々はまた、三つのL—すなわち、(Living) 生きながら、(Learning) 学びながら、(Loving) 愛すること—を、子どもに教えることができるのである。そして、この、三つのLを教えることは、三つのR—すなわち、読み、書き、算—を教える時がくるまでの準備であり、こうして、子ども

たちは徐々に成長していくのである。

設備と教材について

インディアン部落が、中古の中学校の校舎を、幼稚園のために払い下げたのは、昨年の秋だった。それは、体操室と、四つの教室であつた。体操室には、小さな赤い車や、ローラーの上を押して動かせるボート、大小の箱積木、三輪車、ワゴン、それから、大筋肉の発達を促し、ごっこ遊びによい消防手の道具があつた。また、大きな飛行機のタイヤがひとつあり、子どもたちを大よろこびさせた。

一室は、ままごと遊びの部屋になり、子どもサイズの諸道具が用意された。他の一室は製作室で、画をかくためのイーゼルや、玉さし盤、粘土、ゲームなどがおかれたし、また、とかげ、ハムスター（こま鼠の一種）、オーム、カメ、ヒヨコなども飼つてある。特にこれらの小動物は、貴重な宝物だった。どんなに、無口な子どもでも、こういう小さな生きものには、反応を見せてくれた。だんだん口をきくようになり、過剰な自意識をなくして、社会的にさえなつてくるのだつた。

もうひとつの部屋は、リズム活動や、お話のために使われた。種々のリズム楽器—太鼓、カスタネット、マラカス、リズムベル、タンブリンなどが用意された。その内のいくつかは手製のものである。また、リズムやダンスの時に使うスカーフは、子どもの親

や、友人たちから寄付していただいた。この色とりどりのスカーフを、リズム楽器と一緒に、子どもに自由に使わせると、皆、思うように、身体を動かし、自分自身を発見し、表現する楽しさを味わうのに、大いに役立った。

保育内容

幼稚園の目新しさにひかれて、子どもたちの母、祖母、姉、伯母たちまでも来園してくる。

とうとう、私たちは、このおとなたちのための裁縫と料理のクラスを、子どもの保育時間中に開いてもらうよう、家庭局に依頼することになってしまったのである。最初の私たちの希望は、「両親協力幼稚園」―母親が交替で週一回ずつ助手をするやり方―にしたいということだったが、この方法は、ここでは、まだ無理であることがすぐわかった。というのはこの母親たちはたいいて、子だくさんで、その上、いろいろの問題をもっている者が多かったからである。開園第一日目、十七名の母親が十七名の子どもと一緒にやってきて、二日目、三日目とつづけて来園した。

こうしてやっている内に、保育内容も、母親教室も充実してきたが、それは、クリスマス以後までで、その頃になると、物珍しさがなくなり、母親は、幼稚園にこなくなった。しかし、この事業が、本当に発展したのは、その頃からである。内外の政治的な分裂や紛争にもかかわらず、この事業は、だんだん強力になって

いった。折しも、有力な支持者、推進者であった人が、近くの大
学教授として転出してしまったのは、実に大きな損失であった。
彼は、他の人より五十年も前から、インディアンの幼児教育に幻
を抱いて努力してきた人、そして、それにふさわしい教養を備え
た人であったから。その時、ほとんどすべての教育活動―学校教
育も社会教育も―が著しく後退してしまっただが、幼稚園だけは例
外であった。幼稚園教育が、どんなに、子どもたちによいかを知
った親たちが皆、熱心に支持したからである。

被災と復旧

このかなり大きな後退期間の後、私たちはようやく自力でやろ
うとはじめていた。先ず、クリスマスには、家庭訪問をした。
ところが、まるで、この日が前から決まっていたかのように、
元日に、それも零下十七度という寒い日に、幼稚園から出火した
のである。たった一時間で、すべてが焼失した。私は、クリスマ
ス休暇で旅行中だったが、ラジオで、そのニュースを聞いた時
は、全く耳を疑った。幸い、子どもは一人も、建物の中にいなか
ったが、建物と、教育教材は全部なくなってしまったのである。

ところが間もなく、私のところの電話がなりはじめた。町と州
のあらゆるところからの問い合わせや見舞いの電話だった。多く
の人々が、この幼稚園のことを心配し、復旧するための助力をし
ようと申し出てくれたのだ。先ず、モルモン宗の教会が、最近改

装したばかりの礼拝堂を貸してくれたし、商工会議所は、教材教具の費用を出すことを決議した。インディアンの建築管理人たちは、ロッカー、戸棚、砂場、水遊び場などをつくり、床にリノリウムを敷いてくれた。焼け跡近くの倉庫から、焼け残りの道具類を取り出してくれた人たちもあったし、床をこすり磨き、ペンキ塗りをしたのは、教師たちであった。そして、ちょうど、三週間で、私たちは、幼稚園を、前よりも、数等気持ちよい、整った設備のもとで再開することができたのである。

現在と将来

新しい経済計画は、いまや、インディアンの幼児教育事業に、新しい方向を示している。ナバホインディアンは、二十四のクラスを開く資金を要請しているし、アパッチ、サンカルロス、パパゴ、シオックス、ユートスの各インディアン部落が、幼稚園開設の要望を提出している現状である。一般に信じられている通説と反対に、インディアン人口は、年々激増している。一九七五年までには、七五万人に達するであろう。そして、一万人の教師が、インディアンの教育に当たっているのだが、この教師たちは、今後、インディアンのことをよく理解している指導者に、特別の訓練をもらう必要があると思われる。

終りに、私は、アメリカ大統領の顧問的存在で、インディアン問題の権威者である学識経験者、ロバート・ラッセル氏の著述か

ら少しばかり引用したいと思う。

「現今、この科学と技術の時代において、我々は、ほんのちょっとではあるが、人類の相互の關係について注意を払うようになってきた。遠いコンゴや、フィジー島で起こったことが、直ちに、我々の現在の生活と、未来に影響をおよぼすということが、が、現実になってきているからである。大洋は、今や小さな湖、高山も丘にしか過ぎないのである。『一つ世界の我々』という概念は、もう空間的なものでなく、時間であり、我々の思想を支配し、支えるものとなっている。

しかし、この、地球上の親近感にもかかわらず、我々アメリカ人は、最初の原住者であるインディアンを理解することに、失敗してばかりいるようだ。インディアンたちはテレビの画面で大活躍をしているのだが、このこと自体、かえって、真の理解が、どんなに欠除しているかを、示しているのではないだろうか。わが国が、他の国との違いを理解し、尊敬するようにするためには、インディアン教育の仕事を通して学ぶ数々の教訓が、大いに役立つことであろう」

人生に記憶と愛情がなかったならば

それは月と同じように不毛の地であろう——トムリンソン

(平安女学院短期大学・片岡靈恵訳)